

# みんなが暮らしやすい社会

相模原中等教育学校 2年 渡辺 たまき

近年、日本では急速に少子高齢化が進んでいます。その中で、認知症患者数も増加してきています。二〇二〇年現在、国内の認知症患者数は六百二十万人です。これは、六十五歳以上の高齢者の六人に一人が認知症ということになります。そして、二〇二五年には約七百万人にまで増加し、六十五歳以上の高齢者の五人に一人を占めると見込まれています。

私の祖母も認知症患者で、今はまだ一人暮らしが出来ていますが、サポート無しでの生活は困難な状況です。会う度に症状の悪化が感じられ、今では私の誕生日も年齢もわかりませんし、二・三分おきに何度も同じことを聞いてきたり、繰り返し言ったりします。私としては祖母にはできる限り長く一人暮らしをしてほしいですし、それは祖母自身も望むことだと思います。そこで、そのためにはどうしたら良いのかを考えました。

私は、認知症患者の方が暮らしやすい社会をつくるべきだと思います。理由はいくつかあり、認知症患者が増加傾向にあることや祖母が苦勞していることから、というのは勿論、それと共に少子高齢化によって介護する側の負担も増えているからです。社会全体が認知症患者の方をサポートすれば介護側の負担は減ると思います。また、認知症予防の方に力を入れるべきという考えもあると思います。ですが、認知症患者の増加数を減らすには本人の取り組みが最も重要であり、減らすことができて、も祖母を含め今いる認知症患者の方の状況は変わりません。そのため、私は認知症患者の方が出来る限り長く思うように生きられる社会をつく

りたいと思います。

では、認知症患者の方が暮らしやすい社会をつくるにはどうすれば良いのか。私は、地域の人、特に学生が認知症についての理解を深めるべきだと考えました。なぜなら、学生には認知症の介護をしている人が少なく、認知症への誤解を抱きやすいと思うからです。また、将来社会を支えていく立場になるのでその時には認知症患者の方と関わるが増えるから、というのも理由の一つです。学生が認知症への理解を深めるには、学校の道德の授業で認知症のことを扱ったり、「認知症サポーター養成講座」を受講したりすると良いと思います。「認知症サポーター養成講座」とは、都道府県や市町村が主体となつて実施する認知症について学ぶ講座です。これを受講すると認知症サポーターの証として「オレンジリング」というオレンジ色のリストバンドが渡されます。まだ知名度は低いですが、小学生から大人まで幅広い世代がオレンジリングを所有しています。学校の道德の授業や認知症サポーター養成講座では、私達学生が社会に出て働く年齢になるより前に、社会問題となっている認知症の課題と自分事として向き合えるので、早期から地域の未来、国の未来について社会の一員として考えることができます。だから、より良い社会をつくることにとっても有効だと考えました。

このようにして学生が、そして地域みんなが認知症への理解を深め、認知症患者の方が暮らしやすい社会にしたいなと思います。また、認知症に限らず、次世代を担っていく私たちが早いうちから様々な社会問題についてしっかりと理解をし、大人になったら社会を支えつつ自分の知識を子供たちに伝える。そして、年を取ってからは自分たちと子供たちがお互いに支え合う。それがずっと続く素敵な未来をつくっていきたいと思います。